

「近世広島平野における干拓と人々の暮らし」

細萱 京子

I. はじめに

広島市は太田川デルタに位置し、政令指定都市として今日まで発展を遂げてきた都市である。太田川は広島市内を6つに分流して流れ、広島市中心部はその三角州上位置する(図1)。広島市の都市としての歴史は、毛利輝元が1589年に広島城を築城したことから始まる。広島城は川の中州を埋め立てて築城されており、当時から築堤や干拓、浚渫を繰り返し、現在に至るまで広島の人々は「水」と共存する工夫をしてきた。現在にみられる広島平野の姿は近世の干拓事業により形成されたと言っても過言ではない。本稿では広島平野における近世の干拓事業とそれにより変化を受けた人々の暮らしについて探る。

II. 調査内容・方法

文献、古地図から近世における広島平野の干拓事業を抽出し、考察を行う。また、干拓が行われたことで変化を遂げた人々の暮らしについて文献から読み取る。調査対象地域は、広島市中心部とする(図1)。

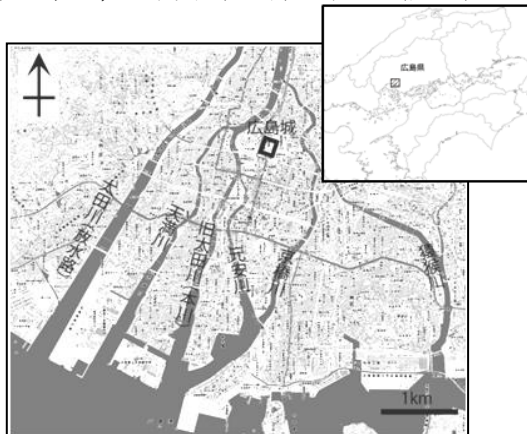


図1 調査対象地域

III. 調査結果

1. 広島市周辺の地形

広島平野は、太田川下流に発達する南北約20kmの沖積平野である。典型的な三角州が発達していることで知られている広島平野であるが、自然の三角州は上流部に限られており、その大半は干拓地や埋め立て地から構成されている。

2. 広島平野の歴史と干拓事業(表1)

広島平野の歴史は1589年に毛利輝元が広島城を築城したことに始まる。この際に三角州の埋め立てが行われた。江戸時代に入って城主に着任した福島氏は繰り返す洪水の対策と土地の拡大のため、更に干拓事業を強化した。その後も干拓事業は続き、現在の広島平野姿を形成していった。

2-1. 近世の干拓史

広島平野の干拓事業のようすが広島藩による古記録『知新集』にみられる。干拓により新たに造成された町は「新開」と呼ばれ、多くの「新開」が造られていった。最も古い干拓の記録は毛利氏による統治の初期で、天文22年(1553)に、治水と干拓を行った記録が残っている。その後、江戸時代に入ると全国的に新田開発の風潮が広がり、諸大名はこぞって海辺の干拓や山林の開墾を推し進めた。広島平野でもそれは例外ではなく、干拓が次々に行われ、「新開」が拡大されていった。特に浅野氏の統治時代には最も開発が進められ、江戸時代の広島城下町の絵図を年代順に見比べると、

寛永年間（1624～44年）の図では、福島氏時代にできた「きりしたん新開」の先に「新新開」が書かれ、承応年間（1652～55年）には新たに「吉島新開」が出現する。

表1 広島城の歴史と主な洪水

年号	西暦	内容
天正 17	1589	毛利輝元、広島城築城の罫(くわ)初め(起工式)を行う。
天正 19	1591	毛利輝元、広島城に入城する。
慶長 5	1600	「関ヶ原の合戦」。毛利輝元、周防・長門2か国へ減封。
慶長 6	1601	福島正則広島城に入城。家臣総動員で修築にとりかかる。
元和 3	1617	洪水により城郭に被害をうける。
元和 5	1619	幕府、広島城の無断修築を理由に、福島氏を改易。
元和 5	1619	幕府、浅野長晟を紀伊から安芸・備後(一部)へ移封。
元和 6	1620	洪水で櫓石垣城廻り堀・堤に被害。
承応 2	1653	大風雨、洪水。櫓・城門・石垣に大被害を受ける。翌年にかけて修理。
元禄 15	1702	大風雨、洪水。櫓・石垣などに大被害を受ける。
文化 8	1811	堀埋まり場所の堀浚えを幕府に申請。
慶応 3	1867	大政奉還。

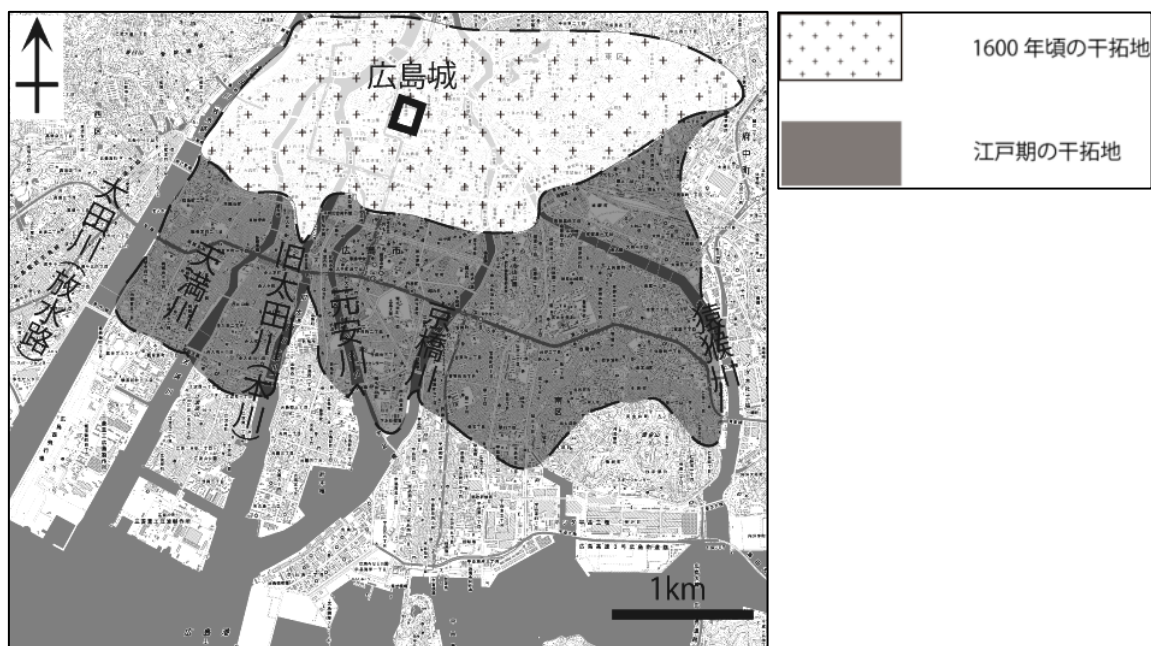


図2 江戸期までの干拓地の拡大

2-2. 干拓技術の発展

浅野氏の統治時代になると、絵図にはいくつかの「樋門」がみられる。江戸時代中～後期になると全国的に「樋門」による干拓が行われ、広島平野でもその干拓技術が導入された。「樋門」の中でも「南蛮樋」というそれまでの唐樋と違い、ロクロの心棒部分と樋門の樋蓋を縄でむすび、鉄製のハンドルを回して樋蓋を上下させることで樋門を開閉させるという当時のオランダ最新技術が浸透すると、干拓の効率が上がり更なる干拓地の拡大を招いた。

2-3. 干拓事業と産業への影響

江戸時代になるとカキなどの養殖業が発達し、それにより生計を立てる人も増えた。それらの人々は干拓された土地の沿岸部に居住した。一方で、干拓により生活を脅かされた人々がいた。彼らは干拓前の土地＝干潟で貝の採集をし、それを売ることによって生計を立てていた。こういった人々の間で対立が生じ、干潟をめぐる「潟争い」

が行われるようになった。『知新集』にはこういった争いとその仲裁のようすが書かれている。

IV. おわりに

広島市の発展は、干拓による領地の拡大と共に進んできた。干拓事業は、江戸期、特に浅野氏の統治時代になるとオランダの最新技術を利用し、盛んに行われた。一方で、当時干潟に居住し生計を立てていた人々にとって干拓は生活を脅かす存在であった。先人の苦勞の結果、現在の広島市は形成されてきたのである。

参考・引用文献

- 広島市役所編（1959）『新修広島市史 第6巻資料編その1』
- 広島県編（1961）「広島県史近世Ⅰ」
- 川上雅之（1978）「広島太田川デルタの漁業史3」たくみ出版
- 木元真作編（1953）『広島新開地干拓史』